

論文の内容の要旨

論文題目 19世紀東アジアにおける科学概念と自然観の変容

氏名 金成根

東アジアの19世紀は、古代中国にその原形として生れ、隣国の朝鮮・日本に伝わった「朱子学」を中心に成立した学問の枠組みが西洋近代の学問によって大幅な転換を強いられた時代である。この東アジアの「近代」と呼ばれる時代が、事実上、西洋近代をモデルとした文明の変革過程というならば、これは自然科学とそれをベースとして成長したテクノロジーを無視して語ることはできない。このような事情は、従来、東アジア科学技術史の研究にも「西欧中心主義」という一つの根強い視角をもたらした。ところが、ジョセフ・ニーダムは一連の巨大な研究プロジェクトを通して東アジアの科学技術は、少なくとも紀元後15世紀までには西欧のそれよりも優れていたという事実を指摘した。彼の研究は、かつての科学技術史において忘れられていた東アジア文明圏の貢献に新しい光をあてたことで重要な意義をもっていながらも、15世紀以降の東アジア科学技術を、西欧科学技術史の文脈の中で捉えていることから、いくつかの問題点を残しているのも確かである。このようなニーダムの視角は、もちろん人類における「科学の単一性」という観念から生まれるものであるが、ゆえに彼においては、それぞれの文明的基盤に根ざした科学なるものも、将来には「単一性」の体系に統合される、という楽観的展望に帰結している。ところが、クーンの新しい科学観は、二つの科学的「パラダイム」を同一の基準にかけて優劣を決

定することができないことを、「通約不可能」という概念を用いて説明しているが、このような科学観は、従来の科学の「累積的」進歩というイメージに革命的な転換をもたらした。クーン以降、東アジア科学技術史は、西欧近代科学という固い制約から逃れ、より幅広い視角によって記述されうる可能性を獲得したと言える。ところが、われわれは西洋類の科学の概念群に還元されることなく、しかも人類の未来に通じうる東アジア科学技術の発展的展望をまだ描いていない。もしわれわれが、西洋類の科学のイメージとはきわめて異なる前提の上に成り立つ科学観、すなわち近代にいたるまで東アジア科学技術の独立した考察が可能であるならば、それが従来とは根本的に違う方向から科学もしくは科学観の発展的地図を描くことも可能になるはずである。ゆえに本論文は、ニーダムによって西欧近代科学の中に溶け込んでいったとされる東アジアの科学技術を再び捉えなおし、その発展的展望を描くことを目的としている。

本論は、大きく二つの部分になっており、第Ⅰ部は19世紀朝鮮の学問、第Ⅱ部は19世紀日本の学問に焦点を合わせている。筆者は、このときそれぞれの学問の基底を成している代表的な自然観のことを「気学的自然観」と「機械論的自然観」という名称として規定した。これには二つの狙いが反映されている。一つは、自然観の変容という劇的な歴史的イベントをより明確に捉えるためには先行の時代と後行の時代から一つの代表的な自然観を取り上げる必要があったことである。もう一つは、東アジア近代において19世紀の科学技術というのは一体何者か、という本質的な質問に迫るためには、当時、東アジアの中でもっとも対極の位置に存在していたに違いない両国を同一の地平において検討するのはきわめて重要な作業になることである。

第Ⅰ部の第一章では、朝鮮後期の儒学思想と「天地」の観念を論じている。われわれは、古代中国伝来の自然観がいかなる連続性を保って朝鮮後期の学問傾向に受け継がれているのかを検討できる。そして、そのような自然観の究極の表現様式として現われた金正浩の『大東輿地図』を第二章で論じている。金正浩の地図から、われわれは「宗教的世界観」と「気学的世界観」という二つの世界観の共存を読み取ることができる。これは、東アジア文明圏において迷信性からの脱却が、たんに西洋近代の科学的「知」への進入を意味していなかったことを明らかにしている。第三章では、崔漢綺によって体系化された「気学」という学問を取り上げ、「感応」という迷信性が「通」的認識論へ転換してくる様相を論じている。崔漢綺は、17～18世紀東アジアの思想空間において、新たなルネサンスを迎えていた「気」の思想の中に「物理」（自然科学）を還元しながら、さらに朝鮮後期の「北学派」に見られる平等的民衆観を取り込んで一応最終的な「気学」の完結を成し遂げていたのである。それは「知」の「普遍性」を外在的に導入してくるのではなく、内在的な「通」の実現から構成されるものとして描いたことに大きな特徴をもっている。このような自然観を、人体という「気」的感応体に適用させ、新しい医学的「パラダイム」を構想したのが、第六章で論じる李濟馬の四象医学である。彼を通して、朝鮮末期の一儒学者が自らの思惟体系をいかに医学という現場に適用しようとしたのかを見ることができる。ところが、本論文では19世紀東アジアにおける自然観の移行もしくは変容に関わる歴史的動因を探るため、

社会史的内容をも取り入れた。それが、西洋諸国の東アジアの軍事的衝撃が朝鮮社会にいかなる影響を及ぼしたのかを論じた第四章と第五章である。この二つの章は、日本近代とは異なる朝鮮の「近代化」の歩みをより鮮明にもの語ってくれると言えよう。

第Ⅱ部の第七章では、日本の江戸時代における朱子学や古学の「自然」概念を論じ、また、江戸後期の蘭学における「物」(matter)概念の形成史を論じている。これによって「気」の概念と対比される西洋類の「物」概念の導入をみることになる。第八章と第九章は、幕末日本の技術史的激変とりわけ軍事的テクノロジーの移植に主な焦点を合わせている。特に、この二つの章は19世紀日本における自然観のドラスティックな変容を説くために、きわめて重要な社会的背景を提示してくれる。すなわち、幕藩体制の特殊性による内戦的状況の勃発、そしてその中で多量に流入される西欧の近代的武器や軍事技術、これ以上東アジアの「近代化」における日本の特殊な歩みを解明してくれる要因はいないと言っても過言ではなかろう。第十章では、西周と「物理」の発見について論じている。この章は、主として第三章の崔漢綺の学問との比較を念頭において書かれた。二人の共通の課題として抱かれた朱子学的「理」の捉え直しによる「物理」と「心理」の分化もしくは統合がいかなる意味をもっているのかを確認できる。西は、「物理」を「心理」から断絶された領域に切り離し、一応従来とは異なる自然界の法則性の探求を用意したのである。また、そのような作業は、漢字文化圏の中に新しい言語を持ち入れることによって進んでいくことになる。第十一章では、「自然」という言葉が nature という西欧近代科学の量化された概念へ変わっていく様相を論じている。これによって、伝来の漢字文化圏における「自然」という言葉の概念転換と同時に、その認識の転換までもが東アジアの学問現場にあらわれる過程を理解できよう。そして第十二章では、近代西欧の科学技術が明治日本の学問空間の中に制度化される様相を論じている。このとき、西欧近代の「機械論的自然観」が東アジアの学問現場に定着したことが理解されるのである。

19世紀東アジアには「自然」(nature)を見る方式に大きな転換が起きた。東アジアに流入された西洋科学は、そのような「自然」をみる新しい方式を前提として成り立つ「知」的体系であった。このとき、もしわれわれが二つの自然観いわゆる「気学的自然観」と「機械論的自然観」の「通約不可能性」をさらに追究していくならば、それは結局、「気学的自然観」と「機械論的自然観」の根幹を成していた「気」(ch'i)と「物」(matter)という概念的述語に還元されるであろう。「気」の概念は、人間と自然界を共通に貫く一種のエネルギーであり、人間の精神と身体をも根底から結びつけているものであった。このような「気」の概念に土台をおく東アジアの人々の「自然」理解は、世界や宇宙の始原さらには人間の生死観などのような古代の宗教的観念とも決して無縁ではない一つの文明のもっとも基本的な認識の根底を反映している。このような過程を理解するならば、われわれは従来の東アジア科学史の記述とはかなり異なる「科学」のイメージと接することができる。本論文では、東アジア圏の中でも「近代化」に一番乗り遅れた朝鮮の例を取り上げ、それを描くことを試みたが、もしこのような新しい科学史の地図がより広範囲に

かけて描かれるならば、それは決して朝鮮後期のある知的潮流に限られるものではないと言えよう。17～8世紀東アジア学問の中には西洋科学の影響をうけつつも、あくまでも「気」の概念を中心として一つの壮大な自然哲学を設計しようとした傾向が存在しており、金正浩、崔漢綺に流れる「知」的潮流は、確かにそのような伝統を受け継いでいるといえることができる。このことは、東アジア文明の「解釈学的基底」に基づくもう一つの「科学」の成立可能性を示唆していると考えられる。つまり、東洋医学を中心としながら、その周辺部に様々な「知」の構造を併せ持つ一つの巨大な「科学」の体系がそこには芽生えていたと言えよう。